ハートキャッチプリキュア！外伝　　伝説の戦士の継承者たち

プシェミスル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートキャッチプリキュア！外伝　　伝説の戦士の継承者たち

【Ｎコード】

Ｎ４０９９Ｕ

【作者名】

プシェミスル

【あらすじ】

砂漠の使徒との戦いが終わって６０年。世界は平和を謳歌していた。プリキュアの名すら忘れ去られようとしている時代。ここ希望ヶ花市にプリキュアの名を継ぐ少女たちがいた。

登場人物

本作の主な登場人物

花咲　くれは　（はなさき　くれは　キュアアプリコット）

キュアブロッサムこと、花咲つぼみの孫娘。伝説の戦士プリキュアの名を継ぐ少女。だが今は世界を脅かす存在がいない為、力を発揮できず暇をもてあましている。性格は大人しく温和。１４歳　中学２年生　アプリコット（梅）の名を持つプリキュア

来海　ゆたか　（くるみ　ゆたか　キュアディープシー）

キュアマリンこと、来海えりかの孫娘。彼女もまたプリキュアの名を継いでいる。くれはとは同じ学校で同級生、性格は大らかで大雑把。世界が平和なため、プリキュアの力を発揮することは無い（現在は）。１４歳　中学2年生　ディープシー（深海）の名を持つプリキュア

花咲　つぼみ

７４歳。かつては世界を救った伝説のプリキュア、キュアブロッサムだった。植物学者であったが、現在は引退し、植物園を管理する傍ら、野菜作りに凝っている。自分が育て作った野菜を家族に食べさせたり、ご近所におすそ分けするのが何よりの楽しみ。もちろん孫娘の成長も。

来海　えりか

７４歳。かつてはキュアブロッサムの相棒、キュアマリンだった。長いことデザイナーをやっていたが、こちらも引退し、静かな余生を送っている。現在でも趣味で服のデザインをしており、実際に服を作っては孫娘たちに（半ば無理やり）着させている。

登場人物（後書き）

このような感じでのらりくらりと書き綴ってまいりますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

第1回　平和なある日

西暦２０７０年、世界は平和を謳歌していた。ここ、希望ヶ花市もたいした事件は起こらず、毎日が平和であった。

「ただいま戻りましたよ。」

花咲くれははそう言って植物園に入ってきた。その植物園の片隅で、土をいじっている１人の人間がいた。

「あら、くれは、お帰りなさい。今日は早かったんですねぇ。」

そう言ったのは、くれはの祖母のつぼみ。かつて砂漠の使徒と戦い、世界の平和を守ったキュアブロッサムこと、花咲つぼみである。

「おばあちゃん、また何か野菜を作っているの？」

「はい、今日はジャガイモが収穫時だったから、それを取っていたんですよ。でも、ちょっと量が多かったみたいですねぇ。・・・そうです、くれは、このジャガイモをえりかの家に持っていってください。」

「わかりました、じゃあ行って来ますね。」

くれははつぼみからジャガイモの入った袋を受け取ると、友人のゆたかが住む来海家へと向かった。

数分後、ゆたかの家に到着したくれはは、ゆたかに招かれ、家にお邪魔した。

「くれは、いつも野菜ありがとう。いつもおいしくいただいているよ。」

「ゆたか、ありがとうございます。えりかさんにもよろしく伝えておいてください。」

しばらくくつろいでいると、不意にゆたかがつぶやいた。

「ねぇくれは、私たちプリキュアだけど、こうも事件が無いんじゃ出番も無いね。」

「そうですね、でもそれでいいんじゃないでしょうか。今この平和な世界があるのはおばあちゃんたちのおかげですから・・・・。」

「うちのばあちゃん世話焼きだけれど、それでもこの平和を守ったんだよね。だから今度はあたしたちがこの世界を守っていかなくちゃだね、それと年長者は大切にしなきゃね。」

「ぷっ・・・そうですよね。」

まったりとした時間は過ぎてゆく。

第2回　わかち合い

『Ｐｒｅｃｕｒｅ　ｏｐｅｎ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ！！』

くれはとゆたかは、それぞれ祖母から受け継いだココロ・パフュームを使い、プリキュアへと変身する。なんでも市街地に、砂漠の使徒の残党が現れたというのだ。そして変身が終わり・・・。

「残雪に咲く一輪の花、キュアアプリコット！！」

「海流に揺れる一輪の花、キュアディープシー！！」

『Ｈｅａｒｔ　ｃａｔｃｈ　Ｐｒｅｃｕｒｅ！！！』

ビシッと名乗りも決め、砂漠の使徒に攻撃を開始する。

「ディープシー、相手はスナッキーばかりみたいですね。」

「それじゃあ、早めに片付けて、終わらせちゃおうじゃないの！」

アプリコットとディープシーは、格闘術でスナッキーたちを倒してゆく。

「退くなら今のうちに退きなさい！今の私は、堪忍袋の尾が切れっぱなしなんですからね！」

「アプリコット・・・言葉の使い方が違うんじゃないかなぁ。」

２人は徐々に追い詰めていき、最後の仕上げに入る。こころの種の

力を用い、相手に止めを刺す。

『プリキュア・おしり（おでこ）パンチ！！！』

変わった名の技ではあるが、威力は強大だ。スナッキーは直撃をもろにくらい、消滅した。

戦いが終わり、２人は元の姿へと戻る。

「一丁あがりねくれは。・・・あれ、どうしたのさくれは？」

ゆたかが見た先は、くれはがおしりを押さえて倒れこんでいる姿だった。

「ゆたかぁ、やっぱりあの技は諸刃の剣です・・・。元に戻ったら強烈におしりが痛くなるんです。」

くれはは涙声でそう言った。アプリコットのおしりパンチは敵に大ダメージをあたえるが、それと同時に自分のおしりにも、ダメージを与えてしまうのだ。

「・・・歩けそう？」

「押さえてください。」

「ったく、しょうがないんだからさくれはは。さっ、家に帰ろう。ばあちゃんたちも心配しているだろうしさ。」

「ゆたか、いつもいつもすみません。」

「全然気にすることは無いよ。あたしたちはプリキュアなんだからさ、お互い持ちつ持たれつ、助け合っていかなきゃね。」

「・・・・・・ありがとう、ゆたか。」

2人は友人であることの喜びをかみしめつつ、家路へとついていった。

「ゆたかは、おでこ痛くないんですか？」

「ぜんぜん痛くないよ。くれはの体がヤワなだけなんじゃない？」

「そ、そんなぁ・・・・・。」

第3回　老いてもなお

休日の晴れた昼下がり、くれははおこづかいを持って来海家へと歩いていた。今日は新しい服を買うため、ゆたかの祖母であるえりかが経営しているファッションショップに行くのだ。

「えりかさん元気でしょうか、まぁあの人のことだからいつも元気なんですけれどね。」

くれはは店内に入る。

「ごめんくださーい、くれはです。・・・・・あれ？誰もいないんでしょうか・・？」

店内に入ったものの、人の気配がしない。くれはは奥の座敷を覗き込んだ。

すると・・・・

「！？！？え・・えりかさんっ！？どうしたんですか！！！！」

えりかは確かにいた。しかし奥に向かってうつぶせになって倒れていた。

「えりかさんっ！しっかりしてくださいよ！！えりかさぁーんっ！！！」

くれはがいくら呼びかけても、意識は戻らない。

「そ・・・そうだ、１１９番通報しなくちゃ！！」
すぐに自身の電話から１１９番通報をしようとした時。

「ふわぁ～～～あぁ、よく寝た～～～」
突然えりかがむくっと起きた。しかものんきに大きなあくびをして。
くれはは思わずずっこけてしまった。

「え・・・・えりかさん？」

「？・・・・・あ、ああくれはちゃん、いらっしゃい。何か用なの？」

「は・・はい、服を買おうかな・・・って思いまして。」

「あ・・・・ご、ごめんね！つい寝ちゃってしまって。ささ、うちの服ゆっくり見ていってちょうだいね。」

「は・・・はい。（よかった、いつもの元気なえりかさんだ。）」
くれはは店に戻り、気に入りそうな服を探している。

「ところでえりかさん、どうして廊下で寝ていたんですか？私はてっきり・・・・・その・・・死んでいるのかと。」

「う～ん、あたしもよくわかんないけれど、最近急に眠気が襲って

くるの。疲れているのかな・・？」

「そうなんですか。あまり無理をしないで下さいね。もう、お歳もお歳なんですから・・・・」

『おでこパーーンチッ！！！！！！！！』（ゴッチーーーン！！！！！！！）

「げぶぅぅぅぅっっっ！！！！！」

くれはは突然えりかに頭突きをされた。あまりの痛さにのた打ち回る。

「な・・・何するんですかえりかさん！」

「くれはちゃんっっっ！！あたしまだ若い連中には負けていないつもりよ！！もう一度さっきの言葉を言ってみなさい！海より広いあたしの心も・・・・・。」

「わかりました・・・・・さっきの言葉は撤回します。」

「わかればよろしいっ！！」

「（こういうところがなぁ・・・・・）」

しばらく店内を見物し、欲しい服が見つかり精算をする。

「毎度ありがとうねくれはちゃん。そうだ！おまけもつけちゃおう。」

「お、おまけですか？（何だか嫌な予感が・・・）」

「これよっ、あたしたちが昔着ていた制服のレプリカ。くれはちゃんに絶対似合うから是非着て頂戴ね。」

「あ・・・ありがとう・・・ございます。」

お礼こそ言ったものの、くれはの顔は困惑していた。

「ありがとうございました、またどうぞ！」

えりかにそう言われ、くれはは店を後にした。

「えりかさん、いつも元気ですね。私も少し見習わなければいけないかもしれませんね。」

ただ、ちょっと元気すぎるのではないかと思うくれはであった。

第４回　故郷、鎌倉へ

「くれは、あと少しですよ、がんばってください。」

「ふぅ、ふぅ、おばあちゃん、これで最後です。」

「ご苦労様ですくれは。」

ここは植物園の中の家庭菜園。くれははつぼみの手伝いをしていた。今日はタマネギの収穫だった。

後片付けを終え、一服していると、つぼみが言った。

「くれは、いつも手伝いありがとうございます。お礼といっては何なんですが、今度２人で鎌倉へ出かけませんか？」

「鎌倉って、おばあちゃんの生まれ故郷ですよね。いいですね、是非行きましょう！」

「決まりですね、じゃあ今度の土曜日に行きましょうか。」

「はいっ！」

そして土曜日、天気は晴れ、絶好の出かけ日和だ。くれはとつぼみは電車に乗り、つぼみの故郷である鎌倉へ向かった。

鎌倉に到着すると、まず２人は鶴岡八幡宮に向かった。

「いいくにつくろう鎌倉幕府。日本で最初の武家政権が誕生したのが、ここ鎌倉なんですよ。」

「初代将軍は源頼朝ですよね。けれど源氏の将軍は僅か3代で絶えてしまった。」

「そして初期幕府を支えていた、梶原、比企、畠山、和田などの一族も滅ぼされてしまった。」

「いずれも北条氏が絡んでいるんですよね。おばあちゃん、人は力を持つと変わってしまうものなんでしょうか。デザトリアンや砂漠の使徒のように。」

「それは・・・・そうとは限らないと思います。」

その後2人は、鎌倉幕府跡や鎌倉五山などの古刹を巡り、若宮大路を由比ヶ浜へと歩く。

「ねぇおばあちゃん、鎌倉幕府を開いたのは源氏だけど、滅ぼしたのも源氏なんですよね。」

「そうですね。幕府を滅ぼしたのは足利高氏と新田義貞。2人とも源氏の血をひいています。高氏は京都の六波羅を、義貞は鎌倉を攻め、北条一族は自害、約１４０年間続いた幕府は滅ぼされてしまいました。」

「何とも皮肉なものですね。自分たちの先祖がが作った幕府を自分たちで滅ぼしてしまったのですから。」

最後はつぼみが中学生まで住んでいた地区に行った。

「この辺りにおばあちゃんの生家があったんですね。」

つぼみが住んでいた家はとうの昔に取り壊され、今は別の家が建っている。

「ここも変わりましたねぇ・・・。私の住んでいた頃とは大分変わってしまいました。」

「そうなんですか・・・。月日って、何だか残酷でもありますね。おばあちゃんたちがプリキュアだったことも、今ではほとんど覚えている人がいなくなりましたから。」

「そうでもありませんよ。くれは、あなたたちが何よりの証拠です。あなたたちは私やえりかの孫娘であり、私たちと同じプリキュアなんですから。プリキュアは夢と希望の象徴ですからね。あなたたちにはそれを後世に伝えて欲しいんです。」

「プリキュアは夢と希望の象徴ですか・・・。そう考えると、ささやかな誇りを持てます。」

帰りの電車の中、くれはは自分に何ができ、後世に何を残せるか考えていた。残せるかといえば・・・・・しまった！大事なことを忘れていた。

「おばあちゃん・・・」

「な、何ですか・・・」

「私たち、何か忘れていますよね。」

「くれはもそう思っていましたか。」

『お土産買うの、忘れていましたぁ・・・・・・・。』

しかし、もう後の祭りであった。

第5回　輝ける太陽

「ほらくれは！早くしないと置いてっちゃうよ！！」

「ゆ、ゆたかぁ、足早いです。もっとゆっくり歩いてください。」

「くれはが単に歩くのが遅いだけだよ。」

今日くれはとゆたかは、それぞれおつかいを頼まれている。くれはは家でつくった野菜を、ゆたかは新品の服を手土産に、２人の通っている明堂学園の理事長、明堂院いつきのところへ顔を出しに行くのだ。

歩くこと数十分、いつきの家である道場に到着した。中では稽古の真っ最中だ。２人は稽古が終わるのを待って顔を出すことにした。

稽古が終わったのを見計らって、くれはが家の呼び鈴を鳴らす。

「ごめんくださーい、花咲くれはです。いつきさんはおりますかー？」

くれはがそう言うと、すぐにいつきが現れた。

「やぁ、くれはちゃんにゆたかちゃんじゃないか。いらっしゃい。」

「こんにちはいつきさん、あのーこれつまらないものなのですが、祖母がつくった野菜です。」

「あたしもつまらないものですが、お洋服です。是非着てください。

」

2人は手土産をいつきに渡す。

「2人ともありがとう、いつももらってばかりで、何もお返しができないでごめんね。」

「いいんです、皆様でおいしく食べてくだされば、おばあちゃんもとても喜びますから。」

「いいんですよ。『いつきは着るものといったら道着と男物の服しかないだろうから、せめてあたし特製の洋服を。』ってばあちゃんが言っていましたから。」

「ちょっと、ゆたかっ！？」

ピクッ

「へ、へぇ～～、えりかがねぇ～。」

いつきは少し声を震わせた。

「ゆ、ゆたか！あまりそういうことは言わないで下さいっ！！」

「だって本当に言っていたんだもん、しょうがないじゃない。」

ゆたかがさらりと答える。

その後2人は座敷へと案内され、お茶を飲みつつ、いつきからかっての砂漠の使徒との壮絶な戦い、パートナーのポプリやつぼみたち

との思い出をたっぷり聞いた。

ふとその時、くれはは1枚の写真を見つける。

「あの～いつきさん？あの写真は・・・・。」

「あぁ、あの写真ね。あれは戦いが終わった後にみんなで撮った集合写真だよ。あのポニーテールの髪形をしたのがキュアブロッサムで、セミロングの髪形をしたのがキュアマリン、君たちのおばあちゃんたちだ。そしてツインテールの髪形をしているのが、キュアサンシャイン。つまり僕だ。」

いつきが写真に写っているプリキュアの説明をする。

「これがいつきさん・・・・・とっても可愛らしいお姿ですね。その姿まさに太陽の如くです。」

「ありがとう、くれはちゃん。そう言われると、ちょっと照れるなぁ・・・・。」

いつきは頬を赤らめる。

「でも今では頭のほうが太陽みたいになっていますけれどね。」

ピクピクッ

「そ・・・それもえりかが・・・・？」

「はい、そう言っていました。」

ゆたかは答える。

「ゆ・・・・ゆたかぁ・・・・。」

くれははもはや呆れるしかなかった。

そして帰り際。

「いつきさん、今日はゆたかが余計なことばかり言って、本当にすみませんでしたっ！！」

くれはがいつきに謝罪する。

「ゆたかっっ！！！あなたもちゃんと謝りなさい！！！！」

「ご・・・ごめんなさい、いつきさん。悪気は無かったんです。ただ、どうしても我慢ができなくて・・・・・。」

ゆたかも続いて謝罪する。

「い、いいんだよ。気にしないで、僕怒っていないから。・・・・あ、そうだゆたかちゃん、家に帰ったらえりかに伝えてくれないかなぁ。明日僕の家に来て欲しいって。」

「え・・・・・？ど、どうしてですか？」

「うん、ちょっとえりかと話したいことがあってね。」

いつきはそう言った。

「いつきさん、さようなら。」

「さようなら、いつきさん。」

「さようなら、気をつけて帰ってね。会いたくなったらまた来てね。いつでも待っているから。」

『はい、必ずまた来ます！』

そう約束し、2人は帰っていった。

翌日、何も知らないえりかは、ゆたかの伝言通りいつきの家に行った。そして無理やり道場に連れて行かれ、怒りのいつきに明堂院古武道のフルコースをくらい、えりかは全治2週間の目にあったのであった。

第6回　誇り

「さて、そろそろ行きますか。」

植物園で花たちの世話（水やりや草取りなど）を終えたつぼみは、何故か花束を持ってどこかへ行こうとしている。

「おばあちゃん、どこへ行くんですか？」

「ある人が眠るところにですよ。」

「ある人が眠る・・・・？」

くれははつぼみの言っている意味がわからなかった。

「知りたいならついて来てもいいですよ。えりかやいつきも途中で合流しますから。」

「えりかさんといつきさんも？わかりました、準備しますのでちょっと待ってください。」

くれはは軽く身支度を済ませると、つぼみと共に『ある人』が眠る場所へ向かった。つぼみの言ったとおり、途中でえりかといつきと合流し、更にはゆたかも一緒だった。

そして数十分後

「さあ、到着しました。」

「あれ？おばあちゃん、ここって・・・。」

一行が到着したのは、希望ヶ花市が管理する墓地だった。中学校のグラウンドほどの敷地に多くの墓が並び立っている。つぼみとえりかといつきは、まっすぐに1つの墓に向かった。くれはたちも黙ってついていく。

「ゆたか、くれはちゃん、ここがその人のお墓だよ。」

えりかがそう言ったお墓には、

ＹＵＲＩ　ＴＳＵＫＩＫＡＧＥ　　１９９３～２０６４

と刻まれていた。

「ばあちゃん、このＹＵＲＩ　ＴＳＵＫＩＫＡＧＥって、一体誰なの？」

「月影ゆり、昔あたしたちと共に砂漠の使徒と戦った『キュアムーンライト』だよ。」

「キュアムーンライトですか？」

くれはとゆたかは。『その人って一体何者？』という顔をしていた。

「ゆりさんは僕たちより3歳年長でね、僕たちがプリキュアになる前からプリキュアとして砂漠の使徒と戦っていたんだ。」

「けれど最終決戦、敵との死闘の果てにパートナーは消滅し、自身も変身能力を失ってしまった。私たちの想像を超えるショックだったと思います。その後、新しくプリキュアの力を手に入れ、砂漠の使徒と戦っていた私たちと出会ったんです。」

「最初に会ったときはとっても『嫌な人』だったなぁ。あたしたちに毎回毎回くどくど文句まがいのことばっかり言ってさ。けれど、今になって考えると、自分のようにはなるなって警告していたんだろうね。」

「僕もサンシャインになったとき、ゆりさんにはこっ酷く言われた思い出があるよ。」

「結構カタブツな人だったんだね。そのゆりさんって人。」

ゆたかは話を聞いてそう言った。

その後ゆりはプリキュアの力を取り戻し、ブロッサムやマリンらと共に砂漠の使徒の野望を粉砕した。

「ですが、その代償はゆりさんにとって大き過ぎました。何せ自分の父親と妹を目の前で失ったのですから。」

サバーク博士やダークプリキュアの話を祖母たちから聞かされたとき、くれはとゆたかは、ゆりの想像を絶する過酷な運命に、驚きと哀しみを感じずにはいられなかった。

その後ゆりは教師の免許を取り、母校である明堂学園の中等部の教師として教鞭をとった後、２０５３年に定年退職した。

そして１０年後、２０６３年の暮れ。

「僕たちが久々にゆりさんの顔を見に行ったら、ゆりさんは歩き方がぎこちなくなっていた。何度か顔を出すたびに悪化していた。食事も喉を通らなくなっていたんだ。」

つぼみとえりかといつきは、すぐにゆりを病院へと連れて行った。精密検査の結果、末期のガンであることがわかった。ゆりは入院し、闘病生活に入った。つぼみたちは何度も見舞いに訪れ、気が沈みがちになっていたゆりを励まし続けた。そして、翌年の春。

「あたしたちは病院から連絡をもらったんだ。ゆりさんの具合が良くないから、すぐに来て欲しいって。」

３人が病室に入ると、ゆりの意識はほとんど無く、喉で呼吸をしていた。医師から、これはもう死にかけている状態だと言われた。

そして数十分後、ゆりは仲間たちに看取られ、その波乱に満ちた７１年の生涯を終えたのである・・・・・。

墓地を後にし、皆で家路についていると、道端にヒメユリの花が咲いていた。

「くれは、ゆたかちゃん、ヒメユリの花言葉は知っていますか？」

「え～っと・・・・わかりません。」

「あたしもわからないなぁ。」

2人はわからないと答える。

「ヒメユリの花言葉は『誇り』です。ゆりさんはその名の通り、誇りと気高さを持って生き抜き、誇りを持ったまま逝きました。」

「ゆりさんはあたしたちの誇りでもあるのだっ！！！」

えりかはエッヘンの顔をして言う。

「ゆりさんは大切な人を次々に失ってしまって、幸せだったんでしょうか？」

しょんぼりした声でくれはは言った。

「僕は幸せだったと思うな。確かに博士やダークプリキュアたちを目の前で失ったけれど、ゆりさんはそんな運命を全て受け入れたんだ。彼女はとてもつよい人だったよ。そして僕たちと出会ってとても嬉しかったんじゃないかな。」

いつきはそう答えた。

「だから君たちも、みんなと自分を信じて生きていって欲しい。以前つぼみが言ってたそうだけど、プリキュアは夢と希望の象徴、皆に笑顔を与えるべく誕生した存在だからね。」

「はいっ！私もゆりさんのように、気高く生きていきます！！」

「お～お～くれはさん、あたしを忘れてもらっちゃぁ困るよ～。」

「わかってますよゆたか、私とゆたかは一心同体ですからね。」

くれはとゆたかは、お互いの友情を確かめ合う。

「あの世のゆりさんも、さぞかし喜んでいるでしょうね。」

「いやぁ～わからないよ、逆にガミガミ説教をたれるんじゃないの？」

「え・・・えりか（汗）。」

月影ゆり、またの名をキュアムーンライト。彼女の命は失われたが、つぼみをはじめとするプリキュアたちの心の中で永遠に生き続けるであろう。そしてこれからも、多くの人々の中に生き続けていくだろう。

エピローグ

「とほほほほ・・・・・・。」

「どうしたんですかゆたか？そんなにしょんぼりとした顔をして。」

「テストで赤点取ってしまったんだよぉ。補習に出なきゃいけないんだよぉっ！！」

「でもゆたかは、そんな苦難を乗り越える胆力がありますからね、補習もどうということはありません。」

「くれは、あんたも結構口が悪いんだね・・・・・。」

ゆたかが愚痴をこぼしていたその時。

「ねぇくれは・・・・あれって。」

「また砂漠の使徒の残党が現れたみたいですね。」

「勘弁してよぉぉっ！これから補習に向けてくれはと勉強会なのにさ！！！」

「グチグチ言っても仕方ありません！いきますよゆたか！」

「ちっきしょうっ！！こうなったらとことんやぁってやろうじゃないのさぁ！！！」

『Ｐｒｅｃｕｒｅ　Ｏｐｅｎ　Ｍｙ　Ｈｅａｒｔ！』

くれはとゆたか、プリキュアの名跡を継ぐ少女２人、彼女たちはこれからいかなる困難があろうとも、共に力をあわせれば必ず乗り越えられるだろう。

「痛ったぁぁぁ！！ねぇアプリコット、あたし腰打ったぁぁぁ！！痛いよおおおお！！！！！」

「ディープシー、右からも来ますよ！気をつけて！」

「あーーーーーん！！！補習はどうなっちゃうのさぁぁぁぁぁ！！！！！」

・・・・・やはり不安で仕方が無い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4099u/

ハートキャッチプリキュア！外伝　　伝説の戦士の継承者たち

2011年7月4日11時56分発行